

ガラテヤ人への手紙6章14節 「十字架の誇り」

1A 肉に対する誇り

1B 知恵、力、富

2B 外見

2A 主イエス・キリストの十字架の誇り

1B 何もない自分の成果

2B 自分に及ぶ神の愛

3B 惜しみない恵み

4B 闇の力の敗北

5B 永遠のいのちの希望

3A 十字架に付けられた世

本文

ガラテヤ書 6 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは、5 章まで来ました。来週、6 章を一節ずつ見ていきますが、今朝は 6 章 14 節に注目したいと思います。ガラテヤ人への手紙を終えるにあたって、パウロが、手紙のまとめのような言葉を残しました。「**しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが、決してあってはなりません。この十字架につけられて、世は私に対して死に、私も世に対して死にました。**」主イエス・キリストの十字架以外の誇りを、誇りとしなないということです。ユダヤ主義者らは、ガラテヤの人たちが割礼を受けたということ、その肉を誇りとしようとしているだけですが、キリストの十字架だけが誇りなのだ、ということです。

1A 肉に対する誇り

1B 知恵、力、富

私たちは、何かを誇りとして生きていくように造られているといっても過言ではありません。神を知っているということを誇りとするように私たち人は、造られていましたが、罪によってその誇りが損なわれてしまいました。違うことに向かってしまいました。エレミヤが、そのことを預言しています。「9:23-24 知恵ある者は自分の知恵を誇るな。力ある者は自分の力を誇るな。富ある者は自分の富を誇るな。24 誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。わたしは【主】であり、地に恵みと公正と正義を行う者であるからだ。まことに、わたしはこれらのことを喜ぶ。」知恵を誇る、力を誇る、そして、富を誇ります。

知恵については、自分が何かを知っていることを誇る人が多いです。けれども、イエス様の姿勢は違いましたね。知恵よりも、父なる神が示されたことをそのまま受け入れて、従っていく、子どものようなへりくだりが必要であることを語られました。「マタ 18:4 ですから、だれでもこの子どもの

ように自分を低くする人が、天の御国で一番偉いのです。」やたらと、知識が多く、それをひけらかす人は、そこに誇りを持っているから、ということが出来るかもしれません。その反面、主に示されたことを素直に信じて、従っていく人が、真の意味で賢いのです。イエス様が祈られました。「ルカ 10:21-22 天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ、これはみこころにかなったことでした。22 すべてのことが、わたしの父からわたしに渡されています。子がだれであるかは、父のほかはだれも知りません。また父がだれであるかは、子と、子が父を現そうと心に定めた者のほかは、だれも知りません。」

次に力を誇ることでありますが、自分が影響力を保持したいので、対等な関係ではなく、いつも自分が上にいることを望んでいます。「上から目線」とか、「マウンティング」という言葉がありますね。力を持っていることを誇りとし、力がない、影響力がないと不安になるのです。けれども、神の恵みにあっては、弱さこそが自分の強さであることをパウロが話していました。「Ⅱコリ 12:9 しかし主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」そして、ロゴス東京の週報に掲げている、ゼカリヤの預言が明言していますね。「4:6『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の【主】は言われる。」

それから富であります。自分が持っていること、所有していることに安心感を得ます。持っていないことで不安になることは、富に信仰を置いていることに他なりません。けれども、イエス様は言われました。「マル 8:36-37 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら、何の益があるのでしょうか。37 自分のいのちを買い戻すのに、人はいったい何を差し出せばよいのでしょうか。」いのちを失う時は、何も持っていけないのです。いつかはなくなるものです。それに、誇りを置いては、どうしようもありません。

2B 外見

このように、知恵、力、富に対する誇りを見ましたが、宗教的な人は、「もちろん、そういったことを誇りに思っていません。私は、神を誇りとしています。」と答えるでしょう。けれども、神を使って自分を誇るという、霊的に見せる外見を誇ることがあるのです。これが、割礼派と言われている人々の動機でした。割礼を受けているということで、人々が神に近づいているとして、それで自分がそれだけ人々を神のものにしたと誇っているのです。また、ユダヤ教の人たちから良く思われたいという動機も働いています。ユダヤ教では、異邦人は割礼を受けて、戒律を守って神の国に入ると教えていますから、割礼を受けさせれば彼らからも受け入れられます。

イエス様は、パリサイ派の人たちがそうした誇りに陥っていることを話していますね。以下に霊的であるか、神に近い人であるかを、人前で見せて誇っているのです。「マタ 6:1-2 人に見せるため

に人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から報いを受けられません。2 ですから、施しをするとき、偽善者たちが人にほめてもらおうと会堂や通りでするように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに言います。彼らはすでに自分の報いを受けているのです。」教会の中で、これはしばしば起こります。教会という、とても小さな世界で、この人はほんと、イエス様を愛しているとして、そのように見られることを求めます。表向きの熱心さがもてはやされるのです。けれども、隠れたところで、人目に付かないところで、主ご自身が喜ばれるからという理由だけで行っている善行こそが、神が報いられます。

知恵、力、富にしても、また外見にしても、結局、自分自身を何とかして誇りたい、という罪の性質があります。

2A 主イエス・キリストの十字架の誇り

ところで、私たちは、どこかで大きな誇りを抱きたいと思っていると初めに、申し上げました。それを、パウロは、「**私たちの主イエス・キリストの十字架**」に置くべきだと話しています。日本人は、遠慮の文化を持っています。すべてを引き下げることによって、相手を持ち上げるようにするのが美德とされます。ある日本人が、アメリカ人の宣教師にこう話したそうです。「ある国の人たちは、誇ったり、威張るのが好きですね。特に、自分の子供たちのことをほめるのが好きです。私たち日本人は、謙虚で穏やかだと思いませんか？」彼は、こう思ったそうです、「そういうこと言うこと自体、誇っていることになりませんか？」そうですね、「私たちは誇りません」といつて誇っているのですから、矛盾しています。

私たち人間は、誇るように造られています。大いに主の御名を誇るのです。そして、その救いの御名を誇るのです。ペテロは、サンヘドリンで大胆にイエスの御名を誇りました、「使 4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」私たちは、賛美において主を誇ります。賛美において、遠慮してはいけません。世の中の人でも、アイドルのファンが、我を忘れてアイドル歌手を応援しますね！イエス様であれば、なおさらのことです。

1B 何も無い自分の成果

主ご自身を誇るのですが、その「十字架」を誇るということは何でしょうか？それは、「自分ではなく、キリストが生きておられる」ことを誇っていることです。「2:19b-20 私はキリストとともに十字架につけられました。20 もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。」自分自身はキリストと共に十字架に付けられていて、死んでいます。死んでいるからこそ、よみがえられたキリストが私の内に生きている、これを誇るのです。

私たちは、いつも思い起こすべきことがあります。すべての良いものは、自分自身の内にあるものではなく、神からの賜物だということです。「I コリ 4:7 いったいだれが、あなたをほかの人よりもすぐれていると認めるのですか。あなたには、何か、人からもらわなかったものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」自分の内には何もありません。けれども言いかえれば、私たちの内にはキリストがおられるので、キリストが多くの実を結ばせてくださいます。「ヨハ 15:5 わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」

2B 自分に及ぶ神の愛

私たちが誇るべきは、十字架に示されている、神の愛です。こんなものにまで及ぶ、神の愛です。「ロマ 5:8 しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」罪人である私のために、ご自分の大切な独り子を死に渡されたのです。イエスご自身も、「ヨハ 15:13 人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」私たちが友と呼び、友である私たちのために、いのちを捨てられたのです。これほどまでに愛されていることを、誇りましょう。主の愛の大きさ、広さ、深さ、高さを誇りましょう。

3B 惜しみない恵み

そして、私たちは、キリストの十字架によって、神が恵んで下さり、事欠くことがないことを知っています。「ロマ 8:32 私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるでしょうか。」自分に必要がいろいろあります。けれども、主がみこころにしたがって、必ず、必要を満たしてくださることは、神が御子を惜しむことなく死に渡して下さったということに基づくのです。

今、旧統一協会の靈感商法が話題になっています。それでキリスト教会が一緒くたにされてしまいがちなのですが、日本においては特に、全く正反対であることを声を挙げている人々がありますね。カトリックの方で政治家の人が、まるでお金もうけなどできない、お金がないから教会堂も修繕できなくて、ぼろぼろ、みたいなことを仰っていました。私もそれを見て、勇気を出して、自分のことをフェイスブックで投稿しました。所得税をしばらく、払っていません！けれども、ロゴス・ミニストリーにある聖書の学びは、すべて無料です。教会外の団体に寄稿やセミナーなどをやっていますが、無料の場合もあれば、謝礼をいただくこともあります。

自分で書いてみて、改めて、なんで、こんな与え続ける働きを 30 年ぐらいやり続けていることができるのかな？とふと、思いました。そこで思い出したのが、今、読んだ御言葉なんです。神は、御子をさえ惜しまずに、そのいのちを私にくださいました。圧倒的な恵みをもって自分の必要を満た

してくださっているのです。いつやめても、神は責められないでしょう。けれども、関わるのは、その恵みにあずかりたいから、ですね。

4B 闇の力の敗北

そして、十字架があるからこそ、闇の力に勝利しています。「コロ 2:13b-15 私たちのすべての背きを赦し、14 私たちに不利な、様々な規定で私たちを責め立てている債務証書を無効にし、それを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。15 そして、様々な支配と権威の武装を解除し、それらをキリストの凱旋の行列に捕虜として加えて、さらしものにされました。」あらゆる霊的勢力に対して、その武装解除をして、さらし者に行っているのです！私たちを責め立てる債務証書は無効にされました。もう、責め立てる者は力を持っていません。「ロマ 8:33-34 だれが、神に選ばれた者たちを訴えるのですか。神が義と認めてくださるのです。34 だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなして下さるのです。」

5B 永遠のいのちの希望

そして、キリストの十字架は希望を与えます。十字架は十字架で終わらず、その死からのよみがえりの希望があるからです。イエス様は十字架に付けられる直前、弟子たちに言われました。「ヨハ 14:19 あと少しで、世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生き、あなたがたも生きることになるからです。」使徒ペテロが、第一の手紙でこう言いました。「1:3b 神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちに新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました。」主が死なれ、そしてよみがえられたように、私たちも新しく生まれ、この肉体が滅びても、また体をもってよみがえる希望があります。

ですから、私たちは神の愛の深さを知り、神が恵みを施して下さる。神が、悪の勢力から私たちを解放し、また永遠のいのちの希望を与えられている。これらが、主イエス・キリストの十字架を誇るということです。

3A 十字架に付けられた世

ですから、自分は世に対して魅力を覚えないし、世も自分に影響を与えることはありません。パウロは、こう語っています。「この十字架につけられて、世は私に対して死に、私も世に対して死にました。」自分はもはや生きていません。生きているのはキリストです。世に対する執着は、もう捨ててきました。イエス様に従っていきます。

英語の賛美で、I have decided to follow Jesus.というものがあります。これは、元々はインド人の宣教師が作ったものです。インドのアッサム州で、ノクセン(Nokseng)という人と、その家族がイ

イエスを信じました。けれども酋長が、非常に怒りました。村民全員の前で、信仰を棄てるように要求します。彼は、こう言いました。「イエス様についていくことを決めました。もう振り返りません。」

酋長は怒り狂いました。弓を彼の息子二人に打つように命じます。「さあ、これで信仰は棄てることだね。今、男の子ふたり殺したが、次は奥さんだよ。」と言ったら、ノクセングさんは、「だれも、いっしょに行かなくとも、それでも私はイエス様に付いて行きます。振り返りません。」と言いました。それで、もっと怒って、彼の妻に弓を打たせ、彼女も死にました。そして、「今度は、あなたが死ぬことになる。信仰を棄てなさい。」と言ったのですが、ノクセングさんは、「十字架が私の前にあります。世は私の後ろにあります。もう振り返りません。」

それで、彼自身を弓矢で殺したのですが、酋長自身が、その信仰を持ったのです！「何をして、この男も、その妻も、息子たちも、二千年前のはるか遠くの男のために死ぬるのか？この家族には、超自然の力が働いているに違いない。」として、イエス様に従う決意をしたのです。それで、村全体が回心した、ということです。この弓矢に打たれる時のノクセングさんの言葉を、そのままインド人の宣教師が歌詞にしました。¹

主イエス・キリストの十字架を誇りとする時に、世は後ろに置いて行きました。自分の前には十字架があります。他の人がどうなのか分かりませんが、けれども、自分はイエス様についていくのです。どうか、この純粋な愛と誇りに立ち返りますように。

¹ <https://thedockforlearning.org/contributions/the-last-words-of-nokseng-the-story-behind-i-have-decided/>